〝随想〟昭和初期、僅か数年で消えた福生本町地区の大グランド

橋本孝蔵

昭和六年、人口六千人に満たない福生村の頃の事です。福生駅を中心に西側地区に商店が集り、現在の二町会と三町会の堺に南新道ができ、この道路から現在の中央町会地区を中心に通称〝停車場地区〟と呼ばれる新開地ができました。まだ現市役所東の栄通りはできておらず、役場周辺は畑でした。まして福生駅の東側地区はほとんど農地で、岸製材、福生不動尊の他、僅か数軒の民家が点在するだけで、現在基地のある一帯は広大な武蔵野の原野でした。

そんな村の時代、八高線が敷設され、東福生駅ができたのが昭和六年十二月です。

この東福生駅の開設については先代の田村半十郎氏を中心に村の有志は国に対し再三に渉り陳情を行い、その誘地に苦労されたという。ですから駅ができてからも、利用者が多い事を示すために、わざわざ村の有志が、東福生から箱根ヶ崎迄、毎日交代で用事もないのに列車を利用したという事です。

そんな時期に現在の本八町会の市営住宅のある場所一帯に約一万五千平方メートルもある大グランドが造られました。まだ福生駅東の富士見通りができる前で、このグランドの南側の道路は東福生駅に通ずる当時のメインでした。

このグランドは両翼百二十メートルもあり、バックネットは鉄道のレールを支柱にした強固なもので、内野の両翼には木製の二段のベンチが設置され、その前にも危険防止の金鋼が張られて、硬球の本格的野球場です。

昭和六年頃は農村不況のどん底で、まだ野球そのものが一般に普及されておりません。子供達はまだゴムマリでせいぜい〝いってきベース〟〝三角ベース〟といった素朴な野球に似た遊びしか知らない時代、軟式野球もま

だこの村にはありません。そんなときに、いきなり硬球で正式な野球ができるグランドができたのです。これは当時とすると誠に大事業です。

誰がこのグランドをつくったのか

元老の話を綜合してみると、やはり停車場地区（現本町地区）の有志特に加藤一良（現駅前藤屋の祖父）、加藤市蔵（先代）、堀田喜代八、梶梅三郎氏等が中心になって活躍されたようだ。『福生村青年団長日誌』に次の様な記事があります。

昭和六年六月二十九日　午后九　男女役員会

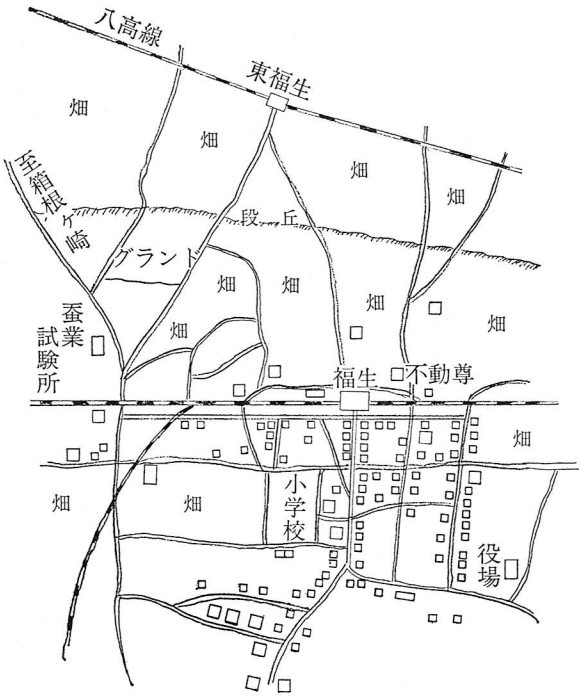
二、グランド設立ニ関スル件

本村第五区（停車場地区）有志発起トナリ福生駅北方ニ約一町五反歩ノ大グランド設立スルコトニ決定シ、本団ニ対シ労力奉仕方ヲ依頼セラル

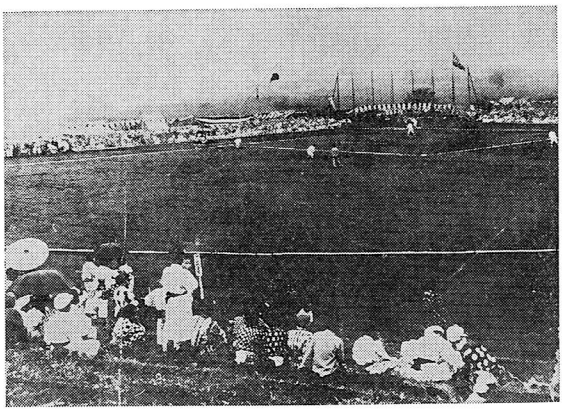
右事項モ第一事項ト同理由ニヨリ、コノ際援助出来兼ヌル旨通知スルコトニ決定

とあります。右回答文のうち「第一事項云々」とは、信用組合より石鹸販売の協力依頼に対し、農繁期に当り、又本団本事案も種々複雑を極めておる為云々……とあります。もしこのグランドが村営であったら、村から補助金を得ている青年団としては、断るわけにはいかないと思います。

おそらく地主田村半十郎氏及び村の当事者もちょうど八高線東福生駅開設という時期でもあり、福生駅東口開発



昭和初期福生駅東側地区



昭和６年福生グランド　（田村貞子氏提供）

を兼ねて本計画には協力的であったと思います。したがって本町の有志はこの敷地を借受け、グランドの建設を行ったといわれておりますが、これに関する資料は見当りません。

昭和六年八月、私が府立第二中学校（現立川高校）四年生の時です。その頃私は陸上競技部に所属していましたので、野球についてはあまり興味がありませんでした。事実青年団等では、郡の大会といえば柔剣道の他に陸上競技が最大の事業で、運動会は各町村毎に行われましたが、軟式野球はまだ青少年の間に普及しておりません。そんな時に福生グランドの開所式には、たしか藤倉電気と東鉄クラブ、オール三多摩と早実クラブという当時都市対抗の最有力チームがこの福生に来ました。まだプロ野球が生れる以前の事です。藤倉・東鉄といえば現在のプロ野球でいう巨人・阪神と同列といえる程で、当時野球界の最高峰でした。

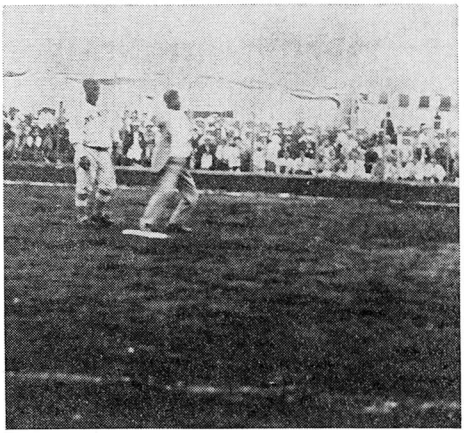
私は始めて硬式の野球を見せられ、陸上競技とはまったく違った所謂ベースボールの面白さに魅せられた記憶があります。いったい誰れが、どうしてこんな田舎へ野球界の最高峰ともいえるチームを招聘する事ができたのか。そして又三多摩在住の優秀な野球人、特に八王子実業、青梅実業等を中心にオール三多摩チームを編成、早実クラブと試合を行ったが、このチーム編成も大変な事だったと思います。このチームに福生からは加藤一良氏と別荘に住んで居た六角正氏が参加している。恐らくこの両氏がこの事業の中心になって活躍されていたようです。

学生会中心に野球熱さかんとなる

当時中学校以上の学校に入った学生を中心に学生会が組織され、青年団とは別に独自な活動をしていましたが、グランドが出来るといちはやく野球チーム〝玉陽〟を結成した。チームの中心は加美の横田寿夫氏（府立二中卒で専門学校在学中）で彼は学生会のリーダーでした。玉

陽は学生の他に社会人である加藤一良、堀田喜代八（堀田薬局店主）等を中心に加藤孫一（市蔵）、六角正、山川義男氏等が中心で、私もセンターでした。

一方実業団チームは、その頃福生村の特産として轆轤（ろくろ）製造業（酒樽、醤油樽の呑口製作）が盛んで〝ろくろう屋〟特に飯田一族の飯田茂・四郎氏や遊佐正三氏等が中心となりチーム〝イーグルス〟を編成、学生チーム玉陽に相対していた。そして昭和八年四月には両チームから選抜して福生球友チームを編成、都市対抗府下予選に出場するまでになった。当時の日日新聞（昭和八年六月三日）付に



昭和6年9月6日福生グランド開場式
（始球式は村長笹本半左衛門氏，左は加藤一良氏）

何れ劣らぬ五強剛　あす熱戦は展開

第一回戦八王子実業―球友（福生）都市対抗府予選

府下球界の強剛＝全青梅、八王子実業、五日市実業、調布実業、福生球友＝の五チーム参加のもとに明四日より新緑の青梅球場に挙行される本社主催第七回全日本都市対抗野球大会府第一次予選は試合組合せも決定し、いよ／＼ファンの血を沸かし白球飛び交ふ熱戦の幕は切つて落されるが技倆伯仲の強剛揃ひのこととて栄ある紅獅子旗は何処へ行く？　全青梅ナインは……（各チームの力量を紹介、最後に）……福生村代表球友ナインは地元の野球熱の高調を機に福生球場を一昨年新設して各地の強剛軍を迎へて技を練り都市対抗戦への出場に練習を怠らず一度打者となれば必ず本塁打をかつ飛ばす加藤一郎君のピカ一を持ち、明四日の第一回戦に八王子実業軍と第一戦のトップを切ることになつた。奮へ各ナイン、紅獅子は躍る

という記事が府下版のトップに大きな活字で載っています。私が中学を卒業した年で、福生グランドができて二年目、村を代表するチームを編成、都市対抗予選に出場するようになった。八王子実業には府下第一人者といわれる剛球の古谷投手（後にプロ球団、中日の前身である金鯱軍に入り一時巨人キラーといわれたが、戦後多摩新

産に入り活躍した）を持つ府下第一のチーム。試合は一方的で三六対五のコールドゲーム。私は六回七回をリリーフしたが、五、六点とられたのを思い出す。

そして翌々年の昭和十年の都市対抗予選に参加。この年は青梅実業は全奥多摩となり新らたに立川実業が参加。福生球友は立川実業と相対しやはり二〇対三のコールドゲームで敗退している。これをみても福生は歴史も浅い、まだまだ未熟で古い町八王子、青梅、立川等と対等に試合のできるチームではなかった。それなのにどうしてまだ小さな村であった福生のチームが、堂々と府下予選に出場したのか。これは誠に大変な事だったと今更しみじみ思い出します。

知らぬ間に姿を消したグランド

昭和初期、また西多摩郡が二町二十一ヶ村の頃、当時西多摩郡連合青年団の各町村対抗の運動会は若者ばかりでなく、まさに数万の観衆が集る、年に一度の、郡の一大イベントでした。しかもこの運動会は町である青梅町、五日市町だけで交互に開催されていました。この運動会を福生グランドに誘地すべく運動が行われ、昭和八年福生で開催される事が決定、村長を中心に協賛会を結成、村をあげて歓迎した。これによって福生村も青梅町、五日市町に次いで、西多摩郡内でも村の上位にランクされるようになりました。この年福生村から福生運動協会へ五円の補助金が支出されておりますが、その運動協会はどんな組織であったか、その実態についてはよくわかりません。

その後大人の硬式野球に対し少年の軟式野球チーム〝ナイト〟〝北斗〟などが生れ、野球は青少年の間に普及されてきましたが、その中心はやはり停車場地区でした。この少年野球で育った青年達が、戦後牛浜にできた町営グランドで、最初に活躍します。

昭和十二年に日華事変が起り、若者は次第に戦場に狩り出され、硬球の野球チームは消滅したが、軟式の少年野球は小学校々庭で盛んに行われていた。昭和十五年陸軍の航空基地が村の東方武蔵野の原野を切り開いて開設され、福生村と熊川村が合併して町になると、人口も増え、住民の生活環境は急速に変り、もはや野球などに興じている時代ではなくなり、知らぬ間にグランドは又元の農地へと変ってゆきました。こうしてまったく誰も知らない間に、幻の如くこの大グランドは消えてゆき、今そこには市営住宅が立並んでいて、グランドの面影すらありません。

村から基地のある町へ、不況のどん底から戦争へと激動の時代に消えて行ったグランドの事など福生の現代史の一駒にもならないでしょう。しかし青春時代このグラ

ンドで、スポーツに夢中になっていた私は、今しみじみと思い出しています。あの不況時代に、あの様な大きなグランドを造り、若者に野球という新しいスポーツを教え、夢を与えてくれた当時の人々の心意気、これはいったい何んだったのか。

現在の企業によるリゾート建設やゴルフ場建設とはまったく異質で、自分達も一緒になって野球を楽しみ、指導し、そして資金を寄付されていた、有志の心意気に心暖まる想いで、今頃になって青春時代のグランドを思い出し、深い感動を覚えています。

（はしもと・こうぞう　市史調査員　加美在住）